

〈自分らしさ〉を迫る時代の国語の学習

村山太郎

【1】はじめに

本稿は、平成十七年度刊行学校図書株式会社『中学校国語2』に新教材として採録された田口ランデイ著「クリスマスマスの仕事」を取り上げ、学習者（中学2年生）の抱える問題と本教材テキストとの接点をにらみつつ、テキストの問い掛けを明らかにし、それを学習者が引き受け自らも応答しようとする学習を論じるものである。

『中学校国語2』採録の田口ランデイ著「クリスマスマスの仕事」の本文は、『その夜、ぼくは奇跡を祈った』（二〇〇一年・大和出版）所収「クリスマスマスの仕事」の抄録で、「クリスマスマスの仕事」の初出は幻冬舎ホームページ「webマガジン幻冬舎」である。また、学校図書ホームページを参照すると「書籍に掲載する際に加筆されており、インターネット版とは異同がある。また教科書掲載に当たり作者自身による加筆訂正がある」とある。さらに本ホームページ「作品紹介」によると、「現代社会が求める消費者としては、もはや存在

できない人たちに光を当てます。ホスピスで安らかな死を待っている人たちです。その人たちとの触れ合いは、消費に追われて暮らしている私たちに何を与えてくれるのでしょうか。慰問の演奏会に訪れた二人の青年は重要な何かをつかみます。」と紹介（※注）されている。

まず、この教材テキストに入る直前の学習者の姿を確認すること
で、本教材と学習者との接点をはかしておく。

1 友達と一緒にいて楽だと思える存在。／私はあまり悩みを言ったりしないし、悩んでいることに対して、深く入り込んで欲しくない。他にも色々あるけど、そういう（私を）分かってくれる。あとは、趣味が同じだったり、会話が弾んだり、お互いに遠慮がいらないのは、とても楽で、いつもの自分の自分である。最初は、とにかく話して、相手のことが分かったら、相手の思うような友人でいたいと思う。お互い楽に、いつものままでいられるならいいと思う。（中2・女子）

2 いつも一緒にいてくれて自分の側にいる人。／普段は別々の行動をとっているけど、1番自分のことを理解してくる人。私

が思うに、友人という時間は、とても大事なもので、自分が一番落ち着くときだと思う。／自分が自然でいられる関係が私の友人観だと思う。かけがえのない存在。自分にとって必要な存在。いなくなると私はとても不安になる。そんな意味を持つのが「友人」だと思う。：（後略）：。（中2・女子）

これは、太宰 治「走れメロス」の学習を通じて、メロスとセリヌンティウスの友人関係の在り方に違和感を抱いた学習者に対して、「ではあなたたちにとって友人とはどのような存在であるのか」を問うたその応答である。そこでは用例1、2の傍線部のごとく、「いつものままの自分でいられる」、「自分が自然でいられる」友人関係が「楽」で「落ち着く」と語られていることが分かる。かかる語り口は他の学習者にも散見されるが、どうやら学習者は友人との関わりのなかで「自分らしさ」の確認をしているようである。問題は、こうした語り口に見える波線部のような友人への要求の言葉。それが同時に表出されていることだ。

例えば用例1では友人とは「そういう」、これは適度な距離を保って付き合いたい「自分らしさ」ということだが、そんな私を友人は「分かってくれる」ものだとする言葉。あるいは友人とは「一番自分のことを理解してくれる人」（用例2）だとする言葉がそれぞれある。ここには、「私」を「私」と見て欲しいとする学習者の、友人への切実な要望が看取されるが、一方でこれは身勝手な論理でもある。なぜなら、学習者にとって友人とは、自分に何か、この何かとは「私」を固有な「私」として認めるということだが、それをしてくれる存在でなければならぬからだ。

「自分らしさ」の確認の場として友人関係を語ろうとする学習者が、一方で他者に対して自分勝手な論理を産出するということが、用例1、2には窺えるが、ここには大きな問題がある。というのも、こうした学習者が「自分らしさ」のうまく機能しないような局面に立たされると、他者を排除したり、他者に対して無関心になったり、「自分らしさ」に固執して頑固になったりするからである。

学習者の抱える問題とは以上のごとく。一方、「クリスマス」の仕事」は、「自分らしさ」が奪われた人間を取り上げ語ること、学習者が内面化してもいる「自分らしさ」なるものを問い掛けたり批評したりするテキストとしてある。かかるテキストの「対話」に学習者が参入することで、「自分らしさ」にしがみつき凝固したそれに振り回される自らの存在の仕方を対象化し、望ましい個の在り方を考えようとする。そうした学習空間をねらいとして本教材を用いた学習を構想した。

これが学習者と本教材テキストとの接点であるが、では本教材テキストはいかなる語りを通じて、「自分らしさ」なるものをいかに批評しようとするのか。次に確認するのはそうした本教材テキストの問い掛けの実際である。

【2】「クリスマス」の問い掛け

「クリスマス」の仕事」の物語内容は、先述の学校図書ホームページ「作品紹介」からの引用の通り、「マイナー」な「フォルクローレ・デュオ」、僕と室井がクリスマス・イブに「目も見えないし、

耳も聞こえないし、体を動かすこともできない……って、言われている」「植物のような状態」の患者さんを前にして演奏を披露するというものである。物語では、そうした患者さんを前に「正直言って、ちよつと怖」いと感じつつも演奏を通じて患者さんの魂を感じる僕の姿が描かれていて、書き手の問い掛けは、患者さんに対する僕の認識の変容にあるとおぼしい。

例えば物語では、僕と患者さんとの初めての対面の場面が描き出されているのだが、そこでは次のような婦長さんと僕との認識のずれが描き込まれている。

3 「びっくりしたかしら。ご覧のとおり、この方たち、皆さん植物のような状態なの。」／「植物……状態？」／婦長さんは、ごくごく当たり前の口調で笑いながら言った。／「そう。皆さん寝たきりの方々。目も見えないし、耳も聞こえないし、体を動かすこともできない……って、言われている人たちなの。でもね、本当はどうなのか、だれにも分からない。そうでしょ、実は聞こえているけど応えることができないだけかもしれない。見えているけれど表現できないだけなのかもしれない。だれにも分からない。でもね、たとえ体のすべての機能がうばわれ、意識がないように見えたとしても、こうして生きているってことは何かを感じてゐることじゃないか、ってわたしは思うのよ。そう信じてゐるの。あなた方はどう思われますか？」／どう思うときかれても、うまく答えられなかった。僕は、正直言っていて、ちよつと怖かった。その人たちは、確かに普通の人間とはどこか違う印象を与える。なんていうか……作りモノみたいだ

った。魂の抜けた人間って感じだったのだ。(『中学校 国語 2』所載、田口ランディ「クリスマスの仕事」70頁)^(73頁)

そこでは、傍線部のごとく「たとえ体のすべての機能がうばわれ、意識がないように見えたとしても、こうして生きているってことは何かを感じてゐることじゃないか、ってわたしは思うのよ」と自分の信念を僕にぶつける婦長さんに対して、二重傍線部のごとく、「なんていうか……作りモノみたいだった。魂の抜けた人間って感じだったのだ」と「普通の人間とはどこか違う印象」をどうしても感じてしまう僕が描き出されているのである。

「植物のような状態」の患者さんに対する、僕と婦長さんとの認識のずれは以上のごとく。さらに物語には、先述のような印象を得た僕の姿だけではなく、演奏を通じて「体のすべての機能がうばわれ、意識がないように見える」「マリコさん」の魂を確かに感じる様子が描き出されてもいる。それが次に挙げる用例4の場面である。

4 ノックの音はさらに強く激しく僕を揺さぶる。開くぞ、開くぞ……そう思ったとたんには、ばーんんと扉がはじけ飛んで、体がふわあつと軽くなった。すぐく暖かな光を感じた。気がつくのと、僕の周りに、たくさんの人たちが集まって、踊ってる。人間の輪郭をした光。輝き浮遊し飛び回る人型。楽しそうだ。みんな、自由になれてとっても喜んでるのが伝わってくる。無数の光が輪を描いてくるくと乱舞している。／そうだ、肉体なんて捨てて自由に踊ればいい。音楽は魂を自由にするのさ。(73頁)

ここではケーナの演奏にのめりこみ、音楽の世界に没入する僕が、二重傍線部に確認できるように、「気がつく」と、僕の周りに、

たくさんの人たちが集まって、踊ってる」と、「マリコさん」たちや患者さんたちの存在に気付く姿が描かれているのである。

要点を絞って書き手の問い掛けが顕在化する場面を取り出したが、では、その問い掛けとはいかなるものになるのだろうか。

それを田口ランディ氏の他テキストに確認することで明らかにする。

5 私はまだ、一度も人を看取ったことがない。／二年前に母が脳出血で亡くなった。風呂場で突然倒れた母は、そのまま救急病院に運ばれて植物人間になった。駆けつけてみると口に管を通して壊れ物のようにダランとしている。まるで魂が抜けかかっているように見えた。「今日明日の命です」と断言されたにもかかわらず、四日後から母は不思議な生命力を発揮して、四カ月の間、植物人間として生き続けた。(田口ランディ『もう消費すら快樂じゃない彼女へ』(一九九九年一月二十五日、晶文社)所収、「I もう消費すら快樂じゃない彼女へ」「看取れない時代」66頁)

6 「頭の良さだけが取り柄の男なのに、皮肉なもんよね」／奥さんはそう言って、藤森さんのほったたをびたびたと叩いた。四年間、奥さんは彼に語りかけ続けた。好きだった音楽を聞かせ、本を読んで聞かせ、呼びかけ、触り、時として激しく泣いて揺すった。だが、藤森さんは一度も彼女に応えることはなかった。／①意識がなくても彼は藤森さんだ。そう見える。では人間の存在って何なのだろう。私という意識をなくしても私は私なのだろうか。わからない。考えるとこんがらがってく

る。／藤森さんは、時々げっぷをしたり、おならをしたりした。それもすべて生理反応だという。アマーバといっしょだ。だとしても私は②彼に人間としての存在を感じずにはおれない。藤森さんは藤森さんだ。脳と人間存在はイコールじゃない。(用例5同書所収、「Ⅲ 世界は二つある」「植物人間の夢」183※注4頁)

用例5では、病床の母親に対面したときの私の感触が、二重傍線部、「口に管を通して壊れ物のようにダランとしている。まるで魂が抜けかかっているように見えた」とあって、その感触が、用例3に見える最初の僕の見方(なんていうか……作りモノみたいだった。魂の抜けた人間って感じだったのだ)と重なる。一方で、用例6の「藤森さん」の場合は違った感触が書き付けられている。

「藤森さん」は「民俗学を研究する学者」で、火事に逃げ遅れて大火傷を負い、「脳の火傷が水泡化し血液の流れが止まった」という人物で本書の「私」とは旧知の間柄であった(用例6同書)。用例6の場面はその「藤森さん」を初めて見舞ったものだが、違った感触はそこに見える。それは「意識がなくても彼は藤森さんだ。そう見える」(傍線部①)や「彼に人間としての存在を感じずにはおれない」(傍線部②)という感触で、これは教材テキストで言えば演奏中の僕の気づきや婦長さんの信念と重なるものである。

このように、書き手は僕と同様の認識の変容を、「私」の体験として書き付けているのである。確認が迂遠なものになったが、用例6には変容過程で生じた「私」の問い掛けとその応答が明示されていて重要だろう。その問い掛けとは用例6の波線部のごとく、「で

は人間の存在って何なのだろう。私という意識をなくしても私は私なのだろうか」というものである。「藤森さん」らしさを失った「藤森さん」を前にして、一方で確かに人間としての存在を感じてしまう「私」が、ここで問うているのは「私という意識」と「人間存在」とはイコールなのかということだろう。そして、「脳と人間存在はイコールじゃない」という言葉はその応答としてあるのだろう。

これこそが、本教材テキストにおいて婦長さんと僕の認識のズレや僕の認識の変容を語ることで問い掛けられていたことだろう。それは「私という意識」に裏打ちされた言動や特徴的な表情、それを言い換えると「自分らしさ」や「個性」だが、それが無いとなぜ人間らしいと感じないのか、「人間存在」として「個性」(「私」という意識)、「脳」とはどのような関わりにあるのかという問い掛けと言い得よう。そうした観点から、教材テキストを振り返ると、当初僕が「植物のような状態」の患者さんと出会って、怖くなり「魂の抜けた人間」と感じたのは、患者さんに「個性」が感じられなかったということなのだろう。そうした僕の認識の在り方を問い、演奏中に患者さんの存在を確かに感じる僕の姿を描くことでテキストは応答しようとしたのである。

【3】書き手の問題意識と学習者との径庭

こうした問い掛けと応答が本教材テキストにはあると見えるのだが、そもそも、本教材テキストの書き手には「個性」を批評しようとする立場が著作のそこそこに見られる。

7 (※私の高校時代の同級生で、「人間の生まれた意味は、人

間は自分を高めることができる」(後掲同書193) ことだと信じ新興宗教での修行に打ち込む「ユウコ」が私を訪ねてきて、私は困惑しながら対応する。) 帰り際にユウコが言った。／「二度考え始めてしまったら。もう後戻りはできなくなった。あたしは生まれてきた意味が知りたい」／純粋な人たちは、いつも自分の意味を求めている。それが彼らを、時としてわがままにし、時として自殺させ、時として犯罪者にしたりする。ずいぶんじゃないか神様、と思う。人にはどう生きるかという選択肢しかない。なぜ生まれたのかも、なぜ死ぬのかも定かではない。人にあるのは「間」だけだ。誕生と死の間。このとりとめのないあいまいな時間。その意味について私たちは何も知らない。(用例5同書所収、「Ⅲ世界は二つある」、「虫の生き様」199頁)

自分の「個性」が気になる人、言い換えれば「自分の意味」を求める「純粋な人」に対する批評の言葉は例えば用例7の「それが彼らを、時としてわがままにし、時として自殺させ、時として犯罪者にしたりする」(傍線部) という言葉に見える。

その他にも、「私の個性」とは「人間としての重荷」であってその重荷を降ろしたとき「人はようやくく生命の尊厳まで立ち還る」と述べる著作もあり、「個性」や「自分らしさ」をこれぞ人間らしさと考えてしまう認識の在り方を問題化しようとする書き手の立場は散見される。本教材テキストもこうした「個性」批評に関する書き手の仕事に位置づけられるべきで、かかる批評の展開が気になると

ころではあるがここでは置き、学習者の初発の感想を確認したい。

では、こうした教材テキストを前にどのような反応を学習者は示すのだろうか。それは、「僕」は心から音楽を楽しんで演奏しているんだと思った。そして、そんな演奏を聞いたから、植物のような状態のマリコさんも涙が出たのだ」（中2・女子）や「植物のような状態のマリコさんが涙を流したところで音楽って凄いなと感じた」（中2・男子）など、「主人公が楽器の演奏を心から楽しんだので、植物のような状態で何もできない患者さんにもそれが伝わっていった。これはきつと、とても凄いことなんじゃないかなあ」（中2・女子）といったもの。学習者の初発の感想を見ると、書き手の問い掛けは全く視野に入らず、むしろこの話を「ひたむきな演奏が人に思いを伝える」物語として見ようとするのが分る。

心のこもる音楽が人と人との間にある隔たりを溶解させ、その場にいるすべての人間に幸福をもたらしていく、そんな感動的なお話だった。先述の学習者の感想からはそのような彼らの声が聞こえてきそうだが、ここにはへ音楽は人間同士の隔たりを超えて伝わるお話し、それは没コミュニケーション状況に対する解決策として頻繁に語られるお話の型であるが、その鑄型でもって本教材を嵌め込もうとする学習者の読みの実態が露わだ。確かに、本教材テキストは「webマガジン幻冬舎版」（初出）から『その夜、ぼくは奇跡を祈った』所収「クリスマスの仕事」を経て、教科書版「クリスマスの仕事」に至る中で多くの改訂・削除があり、教科書版「クリスマスの仕事」は先のお話の型で読もうとしても十分そう読めてしまう。しかし他方で、教材テキストにも描いてある婦長さんのこだわりや

患者さんとの対面で得た僕の直截な感触やその後の僕の変化といった、それこそ本教材テキストの特徴的な叙述は学習者の既視感に満ちた読みの過程で問題にもされないのである。

だが、こうした学習者の反応はどの物語教材でも見られるものだろう。むしろ問題は、そうした実態はそれとして、彼らの既視感の外にある叙述にいかにも注目させるのかにある。次に述べるのは学習者と本教材テキストとの出会いに向けて稿者が工夫した幾つかの実践例である。

むしろその表現に注目させるには、婦長さんと僕との認識のズレを確認させ、僕の認識の変容を考えるよう促すのは当然のこと。授業では、患者さんを「普通の人間とはどこが違う」と見ようとする理由を問うた。これには、ただ生きる患者さんを「自分らしさ」や「個性」でもって見ようとする学習者の眼差し、それは変容前の僕の認識の在り方と重なるものだが、それを顕在化するねらいがあった。はたしてその問いに対する学習者からの応答は、「人間の生活をするということは、しゃべったり、表情があつたり、歩いたり、どこをとつても何か動いていて、それを見て『生きてる』と判断するからだ」（中2・男子）や、「自分たちが、人間が生きている」ということは、社会で何か役割を持っているということだと思っていて、植物のような状態の患者さんたちがその役割を何も持っていないと考えるからだ」（中2・男子）といったもの。「ただ生きることを个性的な表情や特徴的な社会属性でもって違和の情とともに記述しようとするものであった。

さて、こうした学習者の応答を経て、実際の授業ではさらに人

間の生の充実感の中身を次のように説く説明文を補助教材として用いた。

8 この寂しさ(※「絶えずだれかが自分のことを思ってくれている」ということの証拠を)、携帯電話というメディアを用いながら「一日に何度も何度も欲しがらる」一方で、携帯電話を使用するまさにその時、周囲にいる人間には全く関心がない現代社会の(在り方)というのが、わたしたちの社会の中に深くいろいろなところに浸透してきている。それは、実はわたしたちが二百年ほど前に作り始めた、いわゆる近代的な社会というものの極まった形ではないのかなと思います。／近代社会とは、みんな一人一人同じスタートラインに立ってスタートする社会です。どんな階層に生まれても、どんな家庭に生まれても、出発点は同じで、そこから人生の中で何を作り出していくのかで人生の意味が決まってくる。でもその一方、自分が何かをすることの意味や、あるいは自分がここにしていることの理由を自分で見つけなければならなくなった、そういう一種の荷物を人生のスタートから持たないと生きていけなくなったということなのです。悲しいことには、その意味がうまく見つかからない時には、ただ生きることにすらできなくて、もう消えてしまいたいとか、何もしたくないというふうに、生きる力すら失ってしまう。近代社会に生きるわたしたち人間は、どうもそういう厄介な生き物のようなのです。(学校図書株式会社「中学校 国語3」(二〇〇七年二月一〇日発行)所載、鷗田清一「寂しい時代と聴く力」) 挙例のごとく、「自分が何かをすることの意味や、あるいは自分

がここにいることの理由を自分で見つけなければならなくなった」事情を近代という観点から説明し、そこでの問題点、それは傍線部にも示したが、それを「ただ生きること」に耐え難くなっている「近代社会に生きるわたしたち」と説き示すという点で、先述の学習者の違和感の正体を伝えていて貴重であろう。また、挙例直接に、「自分の意味を求め」る人への田口ランディという書き手の問い掛けや批評性に触れる件がある。これも学習者の内面化する眼差しを対象化させ、「クリスマスの仕事」の問い掛けを引き受けさせる働きかけとして有効なものであろう。それが次の用例である。

9 そんな中で、わたし(※論者)が出会った一つの答えがあります。それは田口ランディ著『もう消費すら快樂ではない彼女へ』というエッセイ集の中でランディさんの女友達が語った言葉でした。／てのひらに入るような小さな存在なのに、そして世話を受けないと二十四時間要介護ですぐ死んでしまう、そんなちっぽけな存在なのに、赤ちゃんは、ただ存在することだけのために、こんなに必死になれる。その姿が、弱いものをいっばい抱え込んだ大人たちの世界を明るくした。生きる力を与えてくれた。―(用例8同書)

「クリスマスの仕事」での問い掛けを引き受けるという点で、挙例教材本文に着目させ「弱いものをいっばい抱え込んだ大人たちは赤ちゃんの姿から何に気付いたのか」と発問した。もちろんその答えは、人間は「ただ生きるということ、ただ存在するということだけのために、こんなに必死になれる」ことになるのだが、他人と違った特徴的な(自分らしさ)を伝えることなく、「ただ生きる」「赤

ちゃん」の「必死」な姿。その姿から逆に照らし出されるのは、へ自分らしさ」にしがみつき凝固したそれに振り回され疲弊しつつある学習者自身の姿であろう。

【4】おわりに―学習の課題と発展

以上のように、補助教材を用いつつ「クリスマスの仕事」の問い掛けを整理することで、それに学習者を参入させようと工夫したのが稿者の学習の実際である。こうした学習を経た上で、看過できない書き手の叙述として次の叙述に注目を促した。

10 婦長さんはマリコさんのよだれを丁寧にぬぐった。

11 婦長さんが駆け寄って、マリコさんの目頭を人さし指でなぞってから、彼女の小さな頭を抱きしめた。

それは、へ自分らしさ」を表現できない患者さんたちに対する婦長さんの接し方である。(※注) 挙例傍線部のごとく、マリコさんの「人間存在」を自明視した婦長さんの接し方が、当初の僕の認識の在り方に重なる学習者にとって、婦長さんの信念に沿った行動だと論理的に理解できても、その姿勢を保つには困難な時代での行動だということとは理解できないことだろう。この叙述に、へ個性」称揚の時代に対する書き手の異議申し立ての声が強く響いていると見るのは本教材テキストの問い掛けで明らかにした通り。へ自分らしさ」やへ個性」なるものを対象化した上で、自らの信念に不安を感じていた婦長さんの姿と併せて注目させ、本教材テキストを用いた学習の最後

さて、ここまでの学習を通じてへ自分らしさ」にとらわれていたと自らの存在の仕方を対象化し、新たな個の在り方を考えようとする学習者の応答は多く見られた。本来ならば学習の成果として列挙すべきだが、問題にしたいのはむしろこの学習の課題である。それは、本教材テキストを用いた学習のまとめとして「生きる力」をテーマにした作文に次のような記述が見られることである。

12 自分が辛くて、崩れそうときに支えてもらったときや、誰かを支えてあげたとき。自分一人じゃどうしようもできないことにアドバイスしてくれたときに「生きる力」を得たときだと思っています。中2になってから、そう思えたのは、好きな人にメールで相談したら、まじめにアドバイスしてくれたときでした。崩れそうになった分、「生きる力」を得たときの喜び・嬉しさはすごく大きかったです。『受け身な存在』なのかもしれないが、アドバイスをもらえたときだけでなく、好きな人とメールで「つながってる」とか「すつごく楽しい」とか思えて、「生きる力」を得られたように感じます。好きな人だけでなく、友達からも「生きる力」を得たと思えたことがあります。これも中2になってからです。崩れそうときに、手を差し出して支えてくれた友達がいたことです。「一人じゃないだ」って思えて、すごく嬉しかったです。「生きる力」を得るだけでなく、人との関わりの中で傷ついて「生きる力」を失うこともあるけど、結局は誰かから「生きる力」を得ています。自分一人では、「生きる力」は得られない。他者からしか「生きる力」は得られないと私は思います。(中2・女子)

自分の存在の仕方を「『受け身な存在』なのかもしれません」(傍線部)と押さえているのは、鷲田清一「寂しい時代と聴く力」(学校図書『中学校 国語3』)にあった、「近代社会に生きる私たち人間」の「典型的な行動パターン」(Ⅱ「自分を心の、あるいは意識のあて先にしてくれるような他人を求めろ」こと)と、その問題点(Ⅱ「他人に自分の存在が依存してしまう、あるいは他人と常に密着していないと不安になるという、受け身な存在に自分を追いやってしまう」こと)とを踏まえた上での言葉であろう。だからこの記述には、補助教材での問題を確かに理解したとする学習者の声と、それでもなお他者の与える「自分の生きる意味」を求めたいとする、居直りに似た学習者の声とが聞こえるのである。これは、(「自分らしさ」を迫る近代という時代の根深さを伝える学習者の応答だが、こうした学習者の存在をこの学習の課題と考え、最後にこの課題に応える発展教材を一つ提案し本稿を閉じる。

それは自分の苦悩や辛さとの向き合い方を考えようと呼びかける発展教材、神津十月「止まることを恐れない」(大修館書店『新現代文』、二〇〇二年四月一日発行)である。本文は凝固した(「私」が直面する問題を挙げ不思議な言葉をいくつか紹介することで、その問題を解きほぐす姿勢に触れるというもの。人間が自分の苦悩や辛さとじつと向き合う時間の大切さ、そこでの向き合い方を説くという点で、先の挙例12のような学習者には有効だろう。

注1：学校図書株式会社ホームページ「出典」

(<http://www.gakuto.co.jp/hikokugo/sakuhin02/008c.html>)

より。

注2：同注1「作品紹介」。

注3：初出「webマガジン幻冬舎」では、引用二重傍線部の僕の印象部分に異同があり、初出では該当箇所を「なんていうか…：壊れモノみたいだった。ぶっ壊れた人間って感じだったのだ」とする。

注4：「藤森さん」を取り上げた話題は著者の他テキストに散見される。中でも、田口ランディ『田口ランディの人生相談 神様はいますか?』(二〇〇二年八月二二日、マガジンハウス)所収、「死んだらすべて終わりですか」では、「彼が意識を失った四年間、彼は誰だったのか」という、挙例引用本文と同様の問いが確認できる。このテキストでは「意識」と「魂」を別のヴァージョンと措定しつつ書き手は問いに応答しようとしている。

注5：それは田口ランディ『寄る辺なき時代の希望——人は死ぬのになぜ生きるのか』(二〇〇六年九月三〇日、春秋社)「第一章 老いという希望」に述べられていることだが、その概略を参考までに示しておく。「当時、私は『記憶とはなんだろう』ということをしきりに考えていた。記憶をテーマにした小説を書いてみたかったのだ。私の個性、いや私という存在そのものを作っているもの、それはもしかしたら記憶ではないか。…(中略)：記憶が消えたとき人はどう生きるのか。それを知りたいと思ったのが、そもそもそのきっかけだ。そして、記憶障害について調べているうちに」(同書11頁)、「見学だけでは飽き足らなくなり、友人のツテで京都の医療法人に頼み込み、介護のお手伝

いをしながらグループホームでの生活を体験させてもらった」(同書11頁)。そうした体験を通じて書き手は「人間の存在って何なのだろう」という問いを深め、写真家の藤原新也さんの言葉を踏まえつつ以下のように問いに応答するのである。「しばらくして、(写真家の藤原新也さんは)ご自身のインドでの体験を語り始めた。／「僕の写真集『メモメント・モリ』のなかで、インドの路上で犬が人間を食ってる写真がある。以前にその写真についてメールをくれた人がいたんだ。その人は、いろいろな悩み事があつて右往左往してるときに、あの犬の写真をみると、すごく気持ちが安らぐというんだよね。それは僕の意識と似ているんだよ。犬が人間を食ってるシーンを見たときに、僕はね、すごく気持ちがおさまってきた。…(中略)…犬が人間を食つてるといふのは、ある意味では凌辱的なシーンなんだけど、逆に言えば、犬から食われるほど自分は自由になれたと。よりよく生きようという前向きな感じじゃなくて、自分の重荷を降ろして見てるんだな。生きてることの重荷をね…」／ぐるんと、宙返りして原点に戻った気がした。／そうだった、私が痴呆症の老人たちと出会って思ったことは、まさにこれだったのだ。彼らは人間としての重荷を降ろしていた。そのことに感動したのだ。／人間としての重荷を降ろしたとき、人はようやく生命の尊厳まで立ち還る。生命はすごいんだ。人間じゃなくたって、すごいんだ。動物も植物も、みんなすごいんだ。すべての生命は生命としての光をもっている。…(中略)…人間の重荷を降ろした患者さんたちが、寄り合つてかばいあ

つて、生きてる様子を見た。生きて生きて生き果てていくのを見た。人間はいくら人間を降ろしても、まぎれもなく人間である老人たちの姿に、私は赦された。いま、ここに生きているだけでいいんだ、そう思えたのだ。」(同書71頁)。

注6：「webマガジン幻冬舎」と『その夜、ぼくは奇跡を祈った』所収「クリスマスマスの仕事」とでは、もう一人の患者さん(佐々木さん)が登場するが、その場面に「婦長さんは佐々木さんの手をとっても優しくさすった。彼女が佐々木さんに触れるしぐさを見ていたら、なぜか佐々木さんが人間に思えてきた。」という叙述が確認できる。

(広島大学附属福山中・高等学校教諭)